令和２年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ・いもち病（No. ２）

令和２年６月５日
鳥取県病害虫防除所

６月４日発表の１ヶ月予報によると、向こう１か月は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温が高いことが予想されている。特に期間の前半は、気温がかなり高くなることが予想されている。これらの気象条件は、置き苗における葉いもち、育苗期のいもち病（苗いもち）等の発生に助長的である。これらは本田におけるいもち病の伝染源となることから、以下のとおり適切な管理を行う。

１　発生リスクが高い地域および条件

（１）ハウス育苗（特に５月下旬以降に移植するもの）
（２）育苗期の気温が高い年
（３）昨年いもち病が多発生した地域
（４）これまでに苗いもちが発生したことがある地域
（５）６月以降に移植の露地育苗

２　防除方法

（１）適切な栽培管理

育苗管理	・高温多湿は避ける（ハウス育苗は特に注意）。 ・育苗期間の長期化は発生を助長するため、適切な期間で育苗する。
補植用 置き苗	・早急に撤去する（本田のいもち病の伝染源となる）。

（２）育苗期の薬剤防除（追加防除を行う場合）

処理時期	薬剤名（希釈倍数等）	備　　考
育　苗　期 （本葉 1.5～2 葉期）	ビームゾル（1,000倍） ダブルカットフロアブル（1,000倍） ブラシンフロアブル（1,000 倍）等	・展着剤を加えて散布。 ・いもち病に効果のある粉剤でも防除可能。 ・カスミン剤をは種時に処理した場合は、ダブルカットフロアブル等のカスガマイシンを含む薬剤を使用しない。

（３）その他の参考事項

ア　苗いもちは本田における重大な葉いもち発生源となるだけではなく、多発生した苗を移植すると本田で枯死する。また、発病初期または潜伏期間中の苗を発病に気づかないまま移植した場合は、大規模なずり込みにつながる。

イ　苗いもち発生苗を移植した場合は、抵抗性誘導型等の育苗箱施用剤（イソチアニル剤、プロベナゾール剤等）を使用していても、十分な葉いもち防除効果が得られないことがある。

ウ　本県では、ストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の発生により、平成２７年度から本系統薬剤の育苗箱施用剤の使用を控えている。

エ　育苗期には、イネ苗立枯病も発生するため、病害虫防除指針等を参考にして、薬剤による予防防除を徹底する。